

板付I式甕形土器の成立とその背景

藤尾, 慎一郎

<https://doi.org/10.15017/2230507>

出版情報 : 史淵. 124, pp.1-27, 1987-03-31. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

板付 I 式甕形土器の成立とその背景

藤 尾 慎 一 郎

<目 次>

はじめに

第一章 板付祖型甕・板付 I 式土器の再検討

1. 形態分類
2. 型式分類
3. 板付祖型甕から板付 I 式土器へ

第二章 板付 I 式甕成立の背景

1. 煮沸用土器の中に占める板付祖型甕の比率
2. 板付 I 式甕成立の背景

おわりに

はじめに

板付 I 式土器が、日本で水稲耕作にともなう最古の土器として設定されてから 25 年が経過した。⁽¹⁾ 板付 I 式土器が出土すれば、弥生時代と認定できたのである。1978 年以降、玄界灘沿岸地域で調査された福岡市板付遺跡、糸島郡二丈町曲り田遺跡、唐津市菜畑遺跡における調査成果は、日本の水稲耕作の開始年代を遡らせることとなり、それにともなって農耕にともなう最古の土器は、山ノ寺式土器や夜臼式土器に代表される刻目突帯文土器⁽²⁾ に変わることとなった。

縄文時代晩期からの土器型式の流れを見ると、甕形土器（以下甕と略す）の場合、刻目突帯文土器までは縄文時代以来の型式変化の流れの中で捉えることが可能であるが、後続する板付 I 式土器の甕の成立が、一見縄文土器からの伝

統の上ではストレートに捉えられないところから、板付Ⅰ式甕の系譜をめぐって、現在までに二つの立場から説明がなされてきた。⁽³⁾この問題をつきつめれば、板付Ⅰ式土器の成立にあたって、朝鮮無文土器と縄文土器のどちらが主体的役割を果たしたのかという問題に行きつく。

しかし、最近の刻目突帯文土器研究は、板付Ⅰ式甕の祖型となるべき土器を明確にしている。いわゆる「板付祖型甕」と呼ばれている土器で、この土器の特徴は、刻目突帯文土器のうち、体部に屈曲がなく口唇部のみに刻目を施文するものである。この祖型甕がどのような型式変化を辿って、板付Ⅰ式甕を誕生させるのか、その変遷過程（型式組列）の解明が急務と言える。しかも、その変遷の過程に朝鮮無文土器との係わりをどの程度認めるのかが、問題となるであろう。

本稿の目的は、まず祖型甕から板付Ⅰ式甕への変遷について型式学的検討を行うことである。そのための基礎作業として以下の分析を行う。祖型甕及び板付Ⅰ式甕の型式分類、型式設定後、祖型甕から板付Ⅰ式甕への型式組列の復原。対象とした資料は、佐賀県唐津市から福岡市に至る玄界灘沿岸の諸遺跡出土資料である。⁽⁵⁾

次に、板付Ⅰ式甕を縄文時代以来の土器組成を放棄した弥生土器として完成した、最初の煮沸用土器と捉えることにより、その成立の意味を検討する。板付Ⅰ式土器はその成立時、かなりの夜臼式土器と共伴して出土し、しかも壺と甕では板付Ⅰ式土器と夜臼式土器との比率に差があることが指摘されている。⁽⁶⁾この事実の解釈として、型式学的見地からは夜臼式土器の残存現象と捉える意見も示されてはいるが、甕本来の機能である煮沸用土器としての視点からは、十分な検討がなされているとはいえない。本稿では、夜臼式土器と板付Ⅰ式甕にみられる煮沸用土器としての使い分けについて考えてみる。

註

- (1) 森貞次郎・岡崎敬「福岡県板付遺跡」(『日本農耕文化の生成』, 1961)。
- (2) 本稿で使用する「刻目突帯文土器」とは、縄文時代晩期後半から弥生時代前期初頭の

時間幅の中の山ノ寺式土器、夜臼式土器を総称した意味で使用している。

- (3) この問題についての研究は、田崎博之「弥生土器の起源」(『論争・学説 日本の考古学』4—弥生時代一、1986)があり、詳細は譲るが、それぞれの立場を代表する春成秀爾、橋口達也の説について簡単にふれておく。

春成は、夜臼式土器が縄文人の土器、板付Ⅰ式土器が渡来者集団の土器として捉える。その根拠は、両者が系譜を異にする土器型式であるという前提にある(春成秀爾「弥生時代はいかにしてはじまったか」(『考古学研究』77、1973))。当時、刻目突帯文土器単純期の存在は、唐津市宇木汲田貝塚の調査によって確認されており、祖型甕も報告されてはいたが、その甕を板付Ⅰ式土器の祖型として捉え、板付Ⅰ式土器への変遷過程を検討していく気運はまだなかったのである。故に、板付Ⅰ式土器の成立にあたって朝鮮無文土器の直接的影響を認めることは、そう無理なことではなかったのである。

橋口は、糸島郡曲り田遺跡出土の甕のうち祖型甕の検討を行っている。型式こそ設定していないものの、口唇部における刻目の位置、刻目の原体、外反する口縁部の存在など詳細に検討し、刻目突帯文土器の伝統上で板付Ⅰ式土器の成立は考えられるとした(橋口達也「日本における稲作の開始と発展」(『石崎曲り田遺跡』Ⅲ、今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告11、1985))。

- (4) 「板付祖型甕」という用語を始めて使用したのは中島直幸だが、最初に祖型として捉える見解を示したのは山崎純男である。

- (5) 唐津市菜畑遺跡

中島直幸・田島龍太編『菜畑遺跡』—唐津市菜畑字松円寺所在の縄文・弥生時代稲作遺跡の調査一、唐津市文化財調査報告書5、1982。

同宇木汲田遺跡

小田富士雄他「宇木汲田貝塚」(『末盧国』—佐賀県唐津市・東松浦郡の考古学的調査研究一、1982)。

横山浩一・藤尾慎一郎「宇木汲田遺跡1984年度調査出土の土器について—一刻目突帯文土器を中心に—」(『九州文化史研究所紀要』31、1986)。

糸島郡二丈町曲り田遺跡

橋口達也編『石崎曲り田遺跡』Ⅱ、今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告11、福岡県教育委員会、1985。

福岡市西区十郎川遺跡

吉岡完祐編『十郎川遺跡』—福岡市早良平野石丸・古川遺跡一、住宅・都市整備公団、1982。

同早良区有田七田前遺跡

松村道博編『有田七田前遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書95、1980。

同鶴町遺跡

力武卓治編『鶴町遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書 37, 1976。

同博多区板付遺跡

山崎純男「弥生文化成立期における土器の編年的研究—板付遺跡を中心としてみた福岡・早良平野の場合—」(『鏡山猛先生古稀記念古文化論叢』, 1980)。

沢皇臣「G—6a 地点」(『板付周辺遺跡調査報告書』(4), 福岡市埋蔵文化財調査報告書 38, 1977)。

後藤直・沢皇臣・山口譲治「G—25・G—26 トレンチの弥生時代前期包含層の遺物」(『板付』福岡市埋蔵文化財調査報告書 35, 1976)。

板付 E—5b 調査区出土の資料を、福岡市教育委員会柳沢一男・杉山富雄両氏の御好意により、実測・検討した成果として使わせて頂いた。

横山邦継・後藤直「F—9A 地点」(『板付周辺遺跡調査報告書』(2), 福岡市埋蔵文化財調査報告書 31, 1975)。

沢皇臣・横山邦継編『板付』—県道 505 号線新設改良に伴う発掘調査報告書一, 福岡市埋蔵文化財調査報告書 39, 1977。

森貞次郎・岡崎敬「福岡県板付遺跡」(『日本農耕文化の生成』, 1961)。

- (6) 岡本勇「弥生文化の成立」(『日本の考古学』Ⅲ—弥生時代一, 1966)。岡本によれば、板付遺跡出土の板付 I 式土器は、壺に比べると甕が少なく、板付 I 式甕の不足を夜白式土器の甕で補ったという、相互補完の関係を想定している。

第一章 板付祖型甕・板付 I 式土器の再検討

祖型甕・板付 I 式甕とも同じ分類規準で考えてみる。

1 形態分類 (Fig. 1)

祖型甕・板付 I 式甕の形態的特徴として口縁部形態、口唇部に施文される刻目の位置を挙げる。

① 口縁部形態 直口口縁と外反口縁に二大別でき、更に後者を外反度から五細分する。

直口縁 外反せず直口する口縁部

a 口縁 ほんのわずかにゆるく外反する口縁部

b 口縁 短く鋭く外反する口縁部

c 口縁 ゆるく外反する口縁部

d 口縁 直線的に長く外反する口縁部

e 口縁 大きく強く屈折する口縁部で内面に稜をもつものもある。

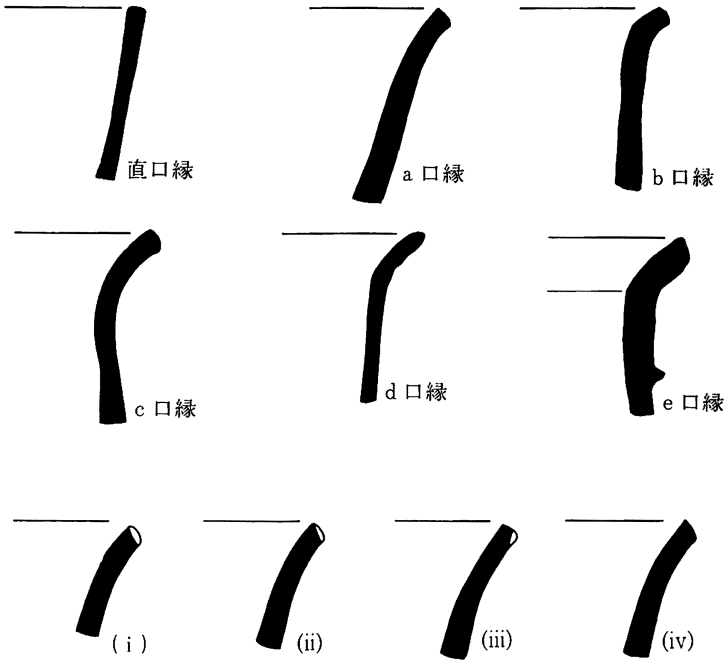


Fig. 1 形態分類（口縁部形態・口唇部における刻目の位置）

② 口唇部に施される刻目の位置 口唇部における位置と、刻む方向から四細分する。

- (i) 口唇部全面。口唇部面に対して垂直に刻目を施す。
- (ii) 口唇部全面。口唇部面に対して外側斜め方向から刻目を施す。
- (iii) 口唇部外端部（下端部）に刻目を施す。
- (iv) 刻目を施さない。

以上、口縁部形態6通り、口唇部刻目の位置4通りの組み合わせを遺跡毎に見たものがTab. 1である。計算上は24通りの組み合わせがあるはずだが、表を見てわかるように18通りしかない。直口縁で刻目を持たないもの（以下直(iv)と表現する）は、祖型甕とは別系統になる縄文時代に一般的な粗製深鉢をさす。刻目を持たないものは祖型甕の範疇からはずれるため、組み合わせがないのは当然

であろう。他に、d(ii)・d(iii)にも類例には存在しない。

さらに、Tab.1を検討してみよう。口縁部形態のあり方（存否）が、遺跡との関連で明瞭に示されていることがわかる。刻目突帯土器単純段階に属する遺跡・遺構（菜畑遺跡9～12層・8下層，宇木汲田遺跡IX層，有田七田前遺跡，板付遺跡G—7a・b下層）からは、c～e口縁部をもつ甕が全く出土していない。逆に、直～b口縁部をもつ甕は先の遺跡・遺構から集中的に出土している。この事実から、先の六つの口縁形態のうちc～e口縁部は板付I式土器以降に属す、甕の口縁部形態であることがわかるのである。また、直～b口縁は祖型甕の口縁形態である可能性が高いということも言えるであろう。ゆえに先の口縁形態は、板付I式土器成立を境に二大別できそうである。

次に、口唇部刻目の位置に注目してみる。先に見た口縁部形態の二大別それぞれについて考える。また、直～b口縁のうち直口縁の甕については菜畑遺跡の状況からみて、全面刻みから外端部刻みへと変化している。⁽¹⁾a・b口縁部を有す甕については、変化を認めることはできない。c～e口縁部を有す甕は、板付I式土器以降に属するため、口唇部刻目が全面から下端へ、そして無文へと変化することは、すでに指摘されている。

以上、形態分類と各遺跡におけるあり方からみて、口縁部形態は板付I式土器の成立をメルクマールに、直・a・bとc・d・eに二大別でき、しかもそれぞれについて、口唇部刻目の位置が全面から下端へと変化することを確認した。この口縁部形態による二大別を第一群土器、第二群土器と仮称する。

2 型式分類

前節での成果をもとに型式を設定するが、さらに幾かの属性を加えて検討する必要がある。本節では口縁部形態・口唇部刻目の位置に、器形（プロポーション）・口縁端部形態・口唇部刻目の施文間隔・器面調整の四つの属性を加え、計六つの属性間の相関をとりながら型式設定を行う。それでは追加した四つの属性について説明しておこう。

① 器形（プロポーション）（Fig. 2）

第一群・第二群土器とも、体部に屈曲がなく底部にむかって単純にすぼまる深鉢形を呈すが、体部の張り具合によって四つに細分した。

o…口縁部から直線的にすぼまる体部

p…口縁部からやや膨らみながらすぼまる体部

q…pより張り気味の体部をもつが、胴部最大径は口径より小さい。

r…口縁下でいったんすばまり体部が張るもので、胴部最大径は口径より大きい。

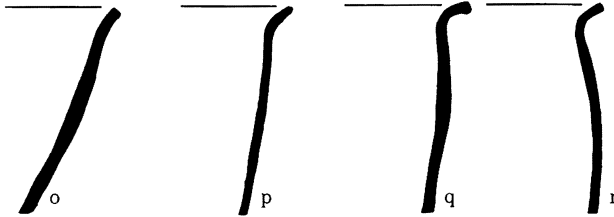


Fig. 2 器形分類

② 口縁端部形態（Fig. 3）

最終調整に左右されると考えられ、四つに分けた。尖らせるもの、丸く仕上げるもの、丸味をもって仕上げるもの、面取りするもの。



Fig. 3 口縁端部形態分類図

③ 口唇部刻目の施文間隔（Fig. 4）

(1) 一つ一つの刻目が相接して施されるものできわめて密である。

(2) 一つ一つの刻目は、一刻目の幅以内の間隔で施されるもので、(1)と(3)の中間の密度をもつ。

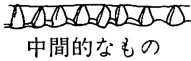
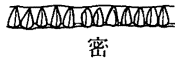


Fig. 4 口唇部刻目の
施文間隔

(3) 一つ一つの刻目は、一刻目の幅をこえる間隔で施され、きわめて疎な密度である。

④ 器面調整

第一群・第二群の甕には、部位毎に多種にわたる器面調整がなされるが、本稿では器表外面の最終調整（仕上げ）を対象とする。調整の種類は四つに大別される。

条痕・ナデ・擦過痕・刷毛目

Tab. 2 は、先の形態分類（口縁部形態と口唇部刻目の位置との組み合わせ）を軸に、追加した四つの属性との関係を見たものである。資料の中には、破片が小さいもの

のや遺存状態の悪いものもあるため、全ての属性がわかる資料は少ないものとなる。したがって Tab. 2 では、四つのうち三もしくは二つしか属性内容の判明していない資料も加えているため、属性項目が異なれば資料数は異なっている。

まず、第一群土器（直・a・b 口縁の甕）から検討しよう。形態分類と関連の認められそうな属性として、口縁端部形態を挙げることができる（Fig. 5）。直口縁をもつ甕では、刻目の位置が全面から外端に移るにつれて、口縁端部形態も

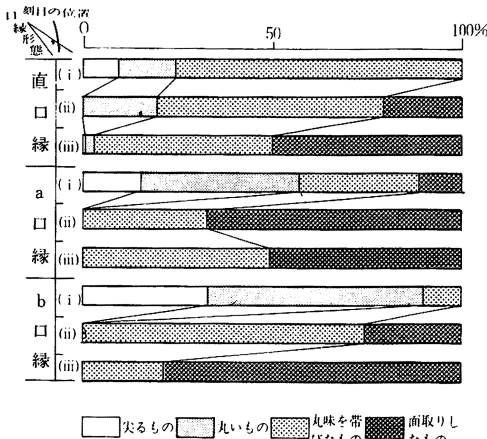


Fig. 5 形態分類と口縁端部形態との相関
（第一群土器）

尖らせるものから面取りするものへと漸移的に変化している。a 口縁をもつ甕では、全面刻目を施す口縁端部には全ての形態が見られるのに対し、その他の刻目は丸味をもって仕上げた口縁端部、面取りした口縁端部にしか施されていない。b 口縁をもつ甕も a 口縁と同じ様相を示している。このように、口唇部刻目の位置と口縁端部形態に相関が認められるのは、口縁端部形態に左右されて刻目の位

属性		刻目の位置 口縁形態		口縁端部形態				器 形				器 面 調 整				刻目の間隔		
				尖	丸	丸味	面取	o	p	q	r	条痕	ナデ	擦痕	刷毛	(1)	(2)	(3)
第一群 土器	直 口 縁	(i)	2 3 15 0 (10.0 15.0 75.0 0)	4 2	7 10	3 13 4 (15.0 65.0 20.0)												
		(ii)	0 5 15 5 (0 20.0 60.0 20.0)	5 9 3	9 12	2 21 2 (8.0 84.0 8.0)												
		(iii)	1 4 67 70 (0.7 2.8 47.2 49.3)	2 57 11	5 62 50 5	7 113 22 (4.9 79.6 15.5)												
	a 口 縁	(i)	3 8 6 2 (15.8 42.1 31.6 10.5)	10 2 1	8 4 5	1 14 4 (5.2 73.7 21.1)												
		(ii)	0 0 2 4 (0 0 33.3 66.7)	2 1	3 2 1	2 4 0 (33.3 66.7 0)												
		(iii)	0 0 5 5 (0 0 50.0 50.0)	1 7	5 3 2	7 3 0 (70.0 30.0 0)												
	b 口 縁	(i)	3 4 2 0 (33.3 57.1 9.6 0)	1 3 1	1 5 1 2	2 6 1 (22.2 66.7 11.1)												
		(ii)	0 0 3 1 (0 0 75.0 25.0)	1	4	0 4 0 (0 100.0 0)												
		(iii)	0 0 3 11 (0 0 21.4 78.6)	5	4 1 3	2 11 1 (14.3 78.6 7.1)												
第二群 土器	c 口 縁	(i)	6 79 87 8 (3.4 43.9 48.3 4.4)	14 50 42 21	63 3 105	34 123 23 (18.9 68.3 12.8)												
		(ii)	2 14 35 7 (3.5 24.1 60.3 12.1)	4 7 17 10	19 1 32	9 39 10 (15.6 67.2 17.2)												
		(iii)	0 8 36 42 (0 9.3 41.9 48.8)	14 24 19	33 50	7 59 20 (8.1 68.6 23.3)												
		(iv)	1 2 3 21 (3.7 7.4 11.1 77.8)	3 8 4 10	11 14													
	d 口 縁	(i)	1 4 4 0 (11.2 44.4 44.4 0)	3 1	5 3	2 5 2 (22.2 55.6 22.2)												
		(ii)	0 1 5 0 (0 16.7 83.3 0)	1 2 2 1	3 3	2 1 3 (33.3 16.7 50.0)												
	e 口 縁	(i)	0 3 1 0 (0 75.0 25.0 0)	2 1 1	2 2	0 3 1 (0 75.0 25.0)												
		(ii)	0 1 10 24 (0 2.8 28.6 68.6)	3 7 10 9	9 20	1 23 11 (2.9 65.7 31.4)												
		(iii)	0 2 13 (0 13.3 86.7)	2 2 10	4 9													
(iv)																		

Tab.2 第一群・第二群土器における形態分類と他属性との関係

置が決まるからである。実際に刻目を施文する工程を想定するなら、面取りした口縁端部であれば、口縁外端部への施文は容易となり、逆に丸っぽい口縁端部であれば難しいといった具合である。

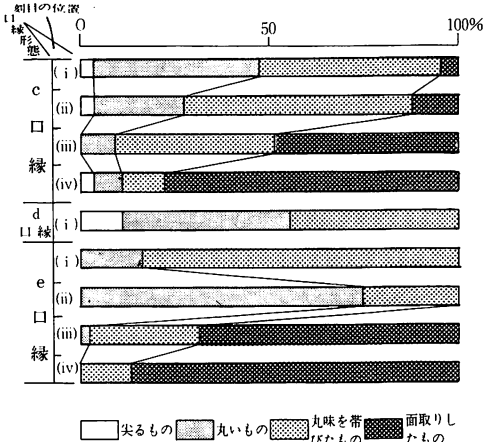


Fig. 6 形態分類と口縁端部形態との相関 (第二群土器)

性を軸に型式を設定できそうである。Fig. 5・6で得られた口縁端部形態の構成比率を参考にして、18の形態分類を幾かのグループに大別したのが Tab. 3, Fig. 7である。

第一群土器

A 直口縁をもつ甕

- 1 口唇部全面もしくはほぼ全面に刻目を施す。口縁端部形態は丸味をもつものが50%以上を占め、面取りしたものはほとんど存在しない(10%以下)。
- 2 口縁外端部に刻目を施す。口縁端部形態は丸味をもつもの、面取りしたものが1:1の割合で存在する。

B 外反口縁(a・b)をもつ甕で、口唇部全面に刻目を施す。口縁端部形態は、尖・丸く収めるものが60%以上を占め、面取りしたものは10%にも充たない。

第二群土器(c・d・e口縁の甕)の場合はいかがであろうか(Fig. 6)。やはり形態分類と口縁端部形態との関係を検討する。各口縁部の甕とも、全面刻目(i・ii)と丸味をもつ口縁端部、下部刻目・無刻目と面取りした口縁端部との間に相関が認められる。

以上、第一群・第二群土器ともに口縁部形態・口唇部刻目の位置・口縁端部形態の間に相関を認めることができた。この三つの属

C 外反口縁 (a・b) をもつ甕で、口唇部のほぼ全面・外端部に刻目を施す。口縁端部形態は、面取りしたものが60%弱を占める。

第二群土器

口唇部刻目の位置で三大別し、口縁部形態で細別した。

D 口唇部全面・ほぼ全面に刻目を施す甕。口縁形態で1～3に細別するが、c口縁をもつ甕が圧倒的に多い。⁽⁵⁾口縁端部形態は、丸いものと丸味を帯びたものが圧倒的で、面取りしたものは10%にも充たない。体部は張りの弱いもの

	口縁形態	刻目の位置	口縁端部形態				器形				器面調整			
			尖	丸	丸味	面取	o	p	q	r	条痕	ナデ	捺痕	刷毛
A	1 直	(i)(ii)	2 (3.7)	18 32.7	30 54.5	5 9.1	5 (21.75)	13 56.5	5 21.75	0 0	16	22		
	2 縁	(iii)	1 (0.7)	4 2.8	67 47.2	70 49.3	2 (2.9)	57 81.4	11 15.7	0 0	5	62	50	5
B	a・b	(i)	6 (21.4)	12 42.3	8 28.6	2 7.7	1 (5.55)	13 72.2	3 16.7	1 5.55	1	13	5	7
C	a・b	(ii)(iii)	0 (0)	0 0	13 38.2	21 61.8	3 (17.6)	7 41.2	7 41.2	0 0	12	10	6	
D	1 c	(i)(ii)	8 (3.3)	93 39.1	122 51.3	15 6.3	18 (10.9)	57 34.5	59 35.8	31 18.8	82	4	137	
	2 d		1 (11.2)	4 44.4	4 44.4	0 0	0 (0)	3 75.0	0 0	1 25.0	5		3	
	3 e		0 (0)	4 40.0	6 60.0	0 0	1 (10.0)	4 40.0	3 30.0	2 20.0	5		5	
E	1 c	(iii)	0 (0)	8 9.3	36 41.9	42 48.8	0 (0)	14 24.6	24 42.1	19 33.3	33		50	
	2 e		0 (0)	1 2.8	10 28.6	24 68.6	3 (10.4)	7 24.1	10 34.5	9 31.0	9		20	
F	1 c	(iv)	1 (3.7)	2 7.4	3 11.1	21 77.8	3 (12.0)	8 32.0	4 16.0	10 40.0	11		14	
	2 e		0 (0)	0 0	2 13.3	13 86.7	0 (0)	2 14.3	2 14.3	10 71.4	4		9	

Tab. 3 形態分類と口縁端部形態・器形・器面調整の相関比率

が50%を占め、張りの強いものは20%前後である。

E 口唇部下端に刻目を施す甕で、口縁部形態から1・2に細別する。口縁端部形態は、面取りしたものが50%から70%と高く、体部の張りも強いものが30%前後を占める。

F 刻目をもたない無文の甕で、外反度が強い口縁が多くなる。口縁端部形態は面取りしたものが80%前後を占め、体部の張りも強いものが40%をこえる。

A~Fの各グループは、遺跡毎にみると次のようなあり方を見せる (Tab. 4)。菜畑遺跡における層毎のあり方を見ると、9~12層ではA1が多く、8下層になるとA2の増加がみられる。8上層(夜臼・板付I式土器共伴期)では、A1はなくA2が圧倒的になると共に、B・Cの普遍化と、Dの出現がみられる。7下層(板付II式土器)では、第一群土器はほとんどなくなり、Eが圧倒的となる。菜畑遺跡の知見より第一群土器から第二群土器へという、大きな時間的前後関係を指摘できると共に、第一群土器内でのA1とA2・B・C、第二群土器内でのDとE・Fに時間的な差を認めることができそうである。また、

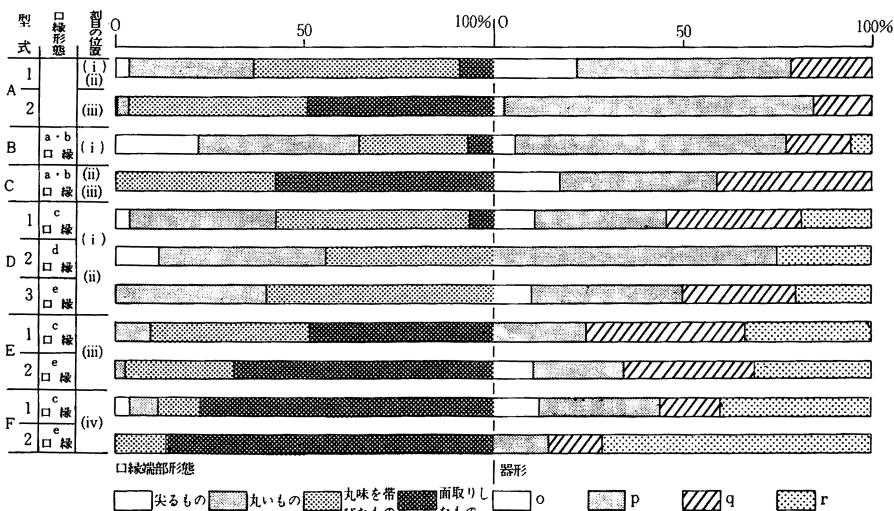


Fig. 7 各型式にみられる口縁端部形態・器形の比率

遺跡名		型式		B	C	D			E		F	
		1	2			1	2	3	1	2	1	2
唐	菜畑 9~12層 8 下層	5	1		2							
		4	4									
津	8 上層		19	5	5	74	3				1	
	7 下層		1	1		9			30	3		1
	字木汲田'64	1	8	3	9	39		1		2	8	3
	'84 IX層	1	10		1							
糸島	曲り田 11住	1	7		4							
	13住		2		2	5	2		4			
	17住	1	4	1	2	6			1			
	33住	10	14	1	5	5						
	40住	4	12		3							
	41住		7	1	1	2						
	42住	1	6		2	3						
	W-3	5	16	3	5							
W-4	3	11		2								
早良	十郎川	2	3			10			1		1	
	鶴町 有田七田前62次	1	2		3	2						
福岡	板付 G-7a・b 下層		4		2	5			4	1		
	E-5b・SD01 環溝		1	9	6	55	5	9	34	19	16	12
	F-9 A・1 豎					1		1	2	2		
	" .5 豎								3	3		1
	A-1・4 豎					1						
	A-2・8 豎					2				4		
B-1・15 豎					1				1	1	2	

Tab. 4 玄界灘沿岸諸遺跡における型式分布

遺跡毎には各グループの存否はないものの、その量に偏りが存在する。⁽⁶⁾板付 I 式土器は、本稿で対象としている地域で成立する型式であり、祖型甕も含めて玄界灘沿岸地域に分布する土器群である。つまり、空間的な広がりは限定されている。したがって、A~F は時間的・空間的な変化を反映していると考えられるため、型式として認定する。(各型式の主要な属性内容を図化したのが Fig. 7 である)。また、第二群土器 (D~F) は、夜臼・板付 I 式土器共伴期より出現することから、板付 I 式土器およびその系譜を引く甕 (板付系統) に相当する。第一群土器のうち A1・A2 は、直口縁をもつことから板付祖型甕⁽⁷⁾ (IV類) に相当する。B・C は、刻目突帯文土器単純期に属するため IV 類の可能

性が高いが、この段階では断定するだけの材料に乏しい。きわめて微妙な立場⁽⁸⁾にある型式と見えよう。

IV類における型式相互間の関係について考える。A1とA2は、菜畑遺跡での層毎の出方からみてA1→A2という変化の方向が想定され、直口縁の甕における口唇部刻目位置の変化として捉えることができる。A1とBは、口唇部刻目の位置が全面であることからして、同じ型式組列上に位置づけられるとすれば、菜畑遺跡での出土状況を考慮することにより、A1→B、すなわち直口縁から外反口縁への変化として捉えることが可能となりそうである。A1→Bへの型式組列の延長上に、板付I式土器の成立を考えるのが、一番蓋然性が高いと考える。BとCとの関係は、型式学的には口唇部刻目の位置の違いであった。A1→A2で想定したように、刻目の位置の変化を想定するならB→Cへの組列も考えられるが、現状ではここまで言える材料はない。

板付系統の三タイプ間における関係については、既存の型式分類があるため、それとの対応を計ることにしよう。Dは、菜畑8上層（夜臼・板付I式土器共伴期）に出現する。口唇部全面に施文される刻目などから考えて、板付I式土器に対応しよう。Eは、菜畑7下層（板付II式土器段階）に出現し、口唇部下端に施文される刻目などから考えて、板付II式土器に対応しよう。Fは、資料数が少ないが板付II式土器に対応し、しかもE→Fの前後関係が考えられる。⁽⁹⁾

さて、板付I式土器については森貞次郎の分類がある。⁽¹⁰⁾森は、「胴の張りの少ない大きな平底の土器で、表面やや細めの刷毛目の整形をしたものが多く、……」と大枠を設定した上で、口縁部の形式によってA・B・Cの三つに分けている。それぞれについて長くなるが引用しよう。

A 如意形断面の形式は完成せず、むしろ夜臼式土器B・C口縁に近く、B・C形式の口縁端の内側を斜めに削り取った形状を呈しているが、その製作手法は薄く伸び上った口縁端内外側に凸帯を貼りつけて整形している (Fig. 8)。

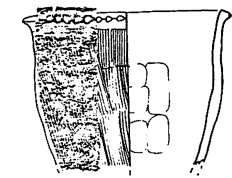


Fig. 8 森分類
板付I式A甕

B 如意形口縁外側に薄い貼付粘土で補強し、口縁端

の尖った形式であるが、口縁端の刻み目は細くまばらであり、器体に刷毛目をもたない (Fig. 10—2)。

C 所謂遠賀川式土器の甕形土器に共通する如意状口縁と口縁端の刻み目を持ち、多くは器体表面を刷毛目整形している (Fig. 10—4)。

森の板付 IA は、口縁部形態 a、口唇部刻目の位置は外端部、口縁端部は面取りしており本稿の C タイプに属す。森の IA は、九州大学所蔵板付遺跡環溝出土土器の中には、管見によれば二点しかなく、しかも他遺跡でも類例がはっきりしない。数も少なく、口縁形態も如意状口縁というより夜臼式土器に近い点を考慮して、別に型式としては設定せず C タイプに含めて考えることにする。⁽¹¹⁾

森の板付 IB は、口縁部形態 c・d、口唇部全面刻目、口縁端部形態は尖ったものと丸味を帯びたもの、刻目の間隔 3 で、本稿の D1・D2 タイプに属す。

森の板付 IC は、型式学的にバリエーションが多いが、本稿の D タイプにほぼ対応する。なかでも D1 が典型例と言える。

以上、森の設定した板付 I 式土器甕 A・B・C のうち、IA は本稿の C タイプ

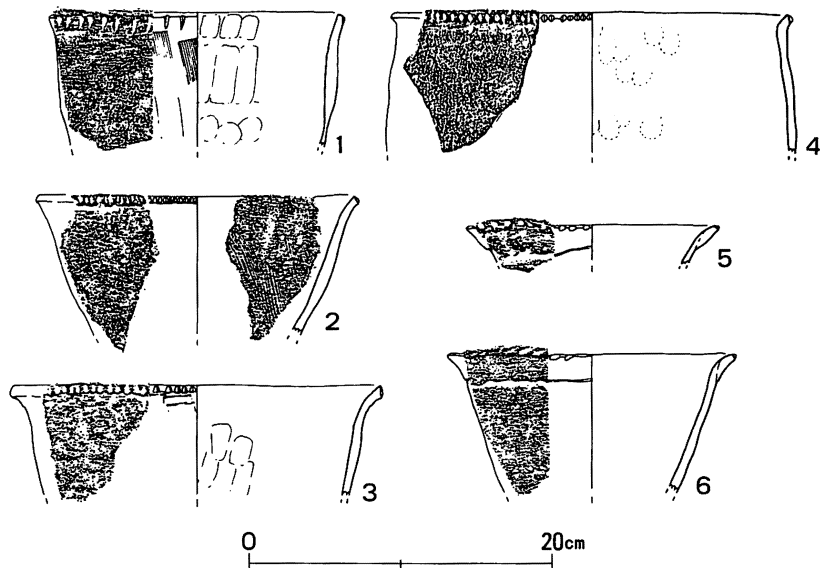


Fig. 9 板付祖型甕実測図 (福岡市板付遺跡環溝出土、九大所蔵分) (縮尺 $\frac{1}{2}$)

に含め、IB・ICをDタイプに含め板付I式土器として考えた。IBについては別個にタイプを設定しうるだけの構成量を持たないためDタイプの中に包括しておく。

3 板付祖型甕から板付I式土器へ

前節では、板付I式土器と明確に言えるDタイプ、祖型甕と明確に言えるA1・A2タイプ、両者の中間の特徴をもつB・Cタイプを設定した。板付I式土器の成立にあたって、祖型甕は主体的役割を果たしていたのであろうか。板付I式土器の成立を考える場合には、A1→Bへの型式組列の延長上に捉えることを指摘しておいた。そこで、B→Dへの型式組列を想定し、型式学的関係について検討する。方法は、山崎純男が突帯文土器と板付I式土器との連続性と非連続性を検討したのにならう。

非連続的要素

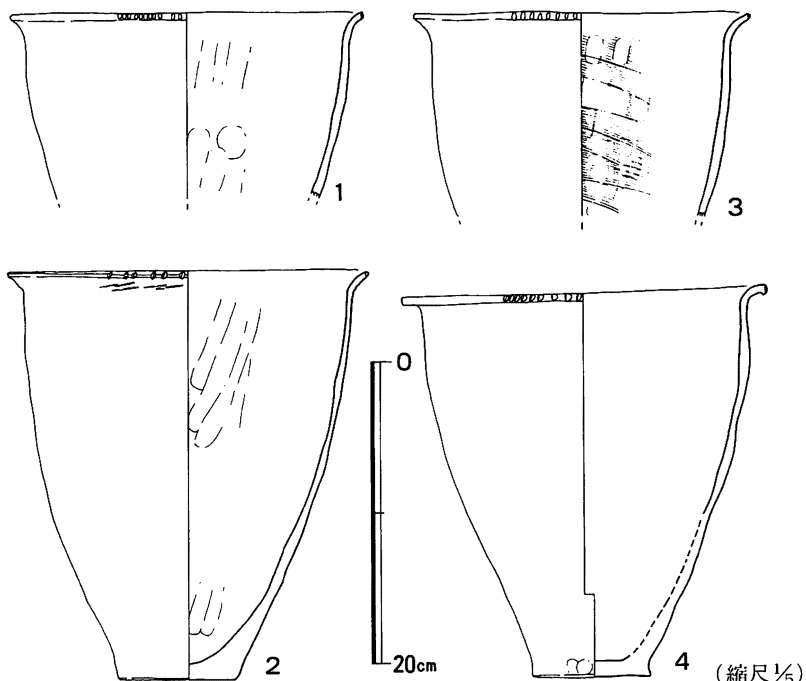


Fig. 10 板付I式甕形土器実測図（福岡市板付遺跡環溝出土、九大所蔵分）

口縁部形態に外反度の差が強く存在し、板付 I 式土器の外反度がかかなり強い。器面調整は、B タイプがナデ、縦方向の擦過痕、刷毛目が平均してみられ、条痕もわずかだが認められる。これに対して板付 I 式土器では、刷毛目・ナデがほとんどである。粘土帯の積み上げについては、接合部で割れた資料がない限り断言はできないと考えるが、B タイプの中でわかっているもののなかでは内傾・外傾の両者が見られ、その量的な関係については不明である。

連続的要素

口縁端部形態の構成比率、口唇部刻目の位置に類似性を認める。

一見、非連続の要素が強いようにもみえる。しかし、漸移的な変化を示す要素もある。器面調整については、擦過痕と刷毛目の場合、器面に残された痕跡は異なるけれど原体や調整法（手の動きなど）は基本的に同じと考えられる。最大の型式学的断絶は、口縁部外反度と粘土帯接合である。

ここで、板付 I 式土器の成立を考える上で興味深い甕がある（Fig. 9—5・6）。口縁下に段をもつもので、板付遺跡環溝部（九大所蔵分）から二点出土している。段は明らかに粘土帯の接合によるものだが、壁の外面に薄く粘土を貼り付けたものではなく、図のような接合をしているようである。器面調整は細密条線に近いもので、しかもほとんどナデ消されている。この種の甕をどう考えたらよいであろうか。一般に、口縁部を外反させる場合の成形技法は、たとえば、A1 から B・C への変化なら、B・C タイプの口縁部の外反の程度から考えて、指先を体部内面に押し当てて、手の平全体で外側に折り曲げれば可能である。しかし、B・C から D への変化はこの程度の技法では不可能である。なぜなら、外反度が強くなり、外反部（口縁部）が長くなれば、口径が大きくなり口縁端部周が増加するため、当然粘土が不足し、なおかつ外反させようと引き伸ばせば、口唇部が薄くなり口縁端部が細くなるか、亀裂等のはいる可能性が高い。これを技術的に克服するには、粘土帯をもう一段追加しながら外反部を成形し、口縁部をつくるしかないと考えられる。この土器は、その辺の事情を反映しているとは考えられないだろうか。また、口縁部の外反技術に関連し

て、Fig.10—2の口縁下につけられた、木口端部の圧痕は、先にみた粘土帯の追加に関連して、追加した粘土をうまくなじませるための入念な押圧とも考えられるし、もしくは口縁部の根元を押圧することにより外反の強調をねらったものとも考えられる。⁽¹³⁾

B→Dへの変化について、口縁部外反の程度の差を埋めるための技術的解決を計ってきた。しかし、換言すればBからDへの変化はあくまでも外反度の程度の問題にすぎない。より重視すべきなのは、外反口縁をもつ甕(B・C)の出現にあるとは考えられないであろうか。口縁部の外反が、いかなる目的ではじまったか、なぜ外反したのかという問に答えることはできなが、一度変化の方向づけがなされたならば(この場合は口縁部の外反という方向づけ)、その方向へ進んでいくのは型式変化の常である。山崎の表現を借りれば、刻目突帯文土器が外来文化の影響を受けた時、器種構成の中に壺をセットとして加え、祖型甕の口縁部外反化をもたらし(B・Cタイプの成立)、さらに一定の時間を経過したあと再度の外来文化の影響(ないしは内的要因)を受け成立したのがDタイプである。山崎は、最初に外来文化の影響を受けた時には、縄文以来の伝統的な土器組成に壺を加えた点だけ挙げているが、祖型甕に生じた口縁部の外反現象は土器そのものにみられる変容と言えよう。これに対し、再度の外来文化の影響(ないしは内的要因)を受けた時には、「突帯文土器の伝統性は保持しながらも、これを異質の土器に変容・分離させ弥生土器を基本的に成立させているからである。」として、前段階よりも強力なインパクトであったとしている。B・CとDの口縁部外反にみられる程度の差も、このような強力な外的、もしくは内的なインパクトに起因するものであろう。

ここでおもしろい事実がある。玄界灘沿岸の諸遺跡における祖型甕のタイプ別比率をみると、菜畑遺跡ではA2、板付遺跡環溝ではBが最も高い比率を示す(Tab.5)。つまり菜畑遺跡では、祖型甕から板付I式土器への型式組列上にはないタイプが圧倒的で、逆に板付遺跡では組列上のタイプが圧倒的ということになる。A1→A2の型式変化は、口唇部刻目の位置が全面から外端部へ移動するという文様の変化のレベルで捉えることができる。しかし、A1→B・C

		I		II	III	IV				板付 I式	小計
		A	B			A1	A2	B	C		
菜 9 畑 12層	出土個体数	90	34	6	42	5	1	0	2		180
	甕形土器 類別比率	124 68.9		6 3.4	42 23.3	8 4.4					100.0
	IV類タイプ 別比率					62.5	12.5	0	25.0		
菜 8 畑 下層	出土個体数	23	6	29	63	4	4	0	0		129
	甕形土器 類別比率	29 22.5		29 22.5	63 48.8	8 6.2					100.0
	IV類タイプ 別比率					50.0	50.0	0	0		
菜 8 畑 上層	出土個体数	1	2	8	99	0	19	5	5	78	217
	甕形土器 類別比率	3 1.4		8 3.7	99 45.6	29 13.4				78 35.9	
	IV類タイプ 別比率					0	65.5	17.25	17.25		
宇 木 汲 田 84	出土個体数	27	5	1	20	1	10	0	1		65
	甕形土器 類別比率	32 49.2		1 1.5	20 30.8	12 18.5					100.0
	IV類タイプ 別比率					8.35	83.3	0	8.35		
曲 り W 田 3 区	出土個体数	34	2	32	38	5	16	3	5		135
	甕形土器 類別比率	36 26.6		32 23.7	38 28.1	29 21.6					100.0
	IV類タイプ 別比率					17.2	55.2	10.4	17.2		
曲 り W 田 4 区	出土個体数	47	1	29	37	3	11	0	2		130
	甕形土器 類別比率	48 36.9		29 22.3	37 28.5	16 12.3					100.0
	IV類タイプ 別比率					18.8	68.8	0	12.4		
有 七 田 前	出土個体数	20	3	123	53	1	2	0	3		205
	甕形土器 類別比率	23 11.2		123 60.0	53 25.9	6 29.0					100.0
	IV類タイプ 別比率					16.7	33.3	0	50.0		
板 付 7a ・ b 下	出土個体数	0	0	18	5	0	0	0	2		25
	甕形土器 類別比率	0 0		18 72.0	5 20.0	2 8.0					100.0
	IV類タイプ 別比率					0	0	0	100.0		
板 付 G 7a ・ G 25 ・ b 1: 26 小 川	出土個体数	1	0	10	17	0	0	0	1	12	41
	甕形土器 類別比率	1 2.4		10 24.4	17 41.5	1 2.4				12 29.3	100.0
	IV類タイプ 別比率					0	0	0	100.0		
板 付 環 溝	IV類タイプ 別比率					0 0	1 6.2	9 56.3	6 37.5	69	

Tab.5 玄界灘沿岸諸遺跡における甕形土器類別比率・祖型甕タイプ別比率

への型式変化は口縁部の外反という土器変容を意味する。板付 I 式土器の成立に、なんらかの外的・内的要因を想定するのであれば、B・C が圧倒的な板付遺跡は、土器変容が起き易い環境にあり、他の遺跡に比べるとその力は、より強力であったと考えられるのである。

ともあれ、口縁部の外反化が、外的・内的な要因のいずれにかかわっているにしても、水稲耕作の開始による生業システムの変化を反映したものであることは確実である。しかし、その主体的役割を果たしたのは、外傾接合など不明な点もあるものの、あくまでも縄文側であったのである。そういう意味で、田中良之の指摘は示唆的である。「したがって、縄文土器から弥生土器への変化は、……（中略……）。それを主体的に荷ったのはあくまでも縄文人とその文化伝統であったといえよう。そして、在来伝統と規制が健在であったことが、無文土器文化との交流や渡来者によってもたらされた情報に対する選択性として機能し、無文土器とは似て非なる土器としての弥生土器を生む結果となったのであろう。」⁽¹⁴⁾

以上、祖型甕から板付 I 式土器へと至る型式組列を復元し、その過程では縄文土器が主体的役割を担ってきたことを説明してきた。次章では、煮沸用土器という視点から板付 I 式甕の成立について考えてみよう (Fig.12)。

註

- (1) 菜畑遺跡出土の板付祖型甕に施文された口唇部刻目の位置が、全面から外端部へ移動することは、中島直幸が指摘している。中島直幸「初期稲作期の凸帯文土器—唐津市菜畑遺跡の土器編年を中心に—」(『森貞次郎博士古稀記念 古文化論集』, 1982)。
- (2) この細分規準では、刻目の大きさ（原体や刻み方に左右される）を考慮していないため、実際の疎密のイメージはかなり異なるであろう。
- (3) 調整に関する見解は以下の文献に従う。横山浩一・藤尾慎一郎「宇木汲田遺跡 1984 年度調査出土の土器について」(前掲)。
- (4) この方法は、一つの土器における全ての属性の共伴関係（組み合わせ）を知る場合には不都合であるが、本稿では後述するように、口縁部形態・口唇部刻目の位置・口縁端部形態の三属性が軸となるため、有効であると考えられる。また、刻目の間隔は必ず明らかになる属性である。よって、口縁端部形態の資料数と刻目の間隔の資料数は同数にな

るはずで、しかも、この数が対象とした全資料数となる。

- (5) D1・D2・D3の比率は、24:1:1である。
- (6) たとえば、A2タイプの分布を空間的にみると、菜畑・宇木汲田・曲り田遺跡など玄界灘西部では数多く存在するが、板付遺跡など玄界灘沿岸東部ではあまり目立たない (Tab.5)。この点については後述する。
- (7) 横山・藤尾「宇木汲田遺跡 1984 年度調査出土の土器について」(前掲) で用いた器種分類である。本稿でも踏襲する。板付祖型甕の事である。
- (8) Cタイプは、口唇部外端刻みであるため祖型甕に含まれる。Bは、菜畑9～12層・板付G—7a・b下層で出土している祖型甕に含めてよいと考えられる。
- (9) E・Fについては、今回対象とした遺跡の時期が板付I式土器成立前後を中心としているため、資料数もきわめて少ない。E・Fについてはこれ以上の分析は行わず次回機会に譲りたい。
- (10) 森貞次郎・岡崎敬「福岡県板付遺跡」(前掲)。
- (11) 筆者は、口縁部に一条の刻目突帯をもつ夜臼式土器(Ⅱ類)と考えている。
- (12) 家根祥多「縄文土器から弥生土器へ」(『縄文から弥生へ』、帝塚山考古学研究所、1984)。
- (13) 板付I式土器のなかには、口縁下を起点にして縦方向に刷毛目調整を行う甕が多い。もちろん板付Ⅱ式土器にもこの手法は継承されているが、時期が降るとヨコナデ調整を丁寧に行う事により、刷毛目の起点が消されている甕が多い。板付I式土器では、そのような手法が部分的にしかみられないため、わりとよく残っている。この刷毛目技法も、先の木口の押圧と同様の意義づけができるであろう。
- (14) 田中良之「縄文土器と弥生土器—西日本—」(『弥生文化の研究』4—弥生土器I—、1986)。

第二章 板付I式土器成立の背景

玄界灘沿岸の諸遺跡における、刻目突帯文土器単純段階から弥生時代前期の甕(粗製深鉢を含む)の組成、及び祖型甕のタイプ別比率を示したのが Tab.5 である。

1 煮沸用土器の中に占める板付祖型甕の比率

(1) 刻目突帯文土器単純期

祖型甕の構成比率を高い方から単純に並べると、曲り田W—3区の21.6%

から菜畑 9～12 層の 4.4% まで幅が広い。そこで、他の器種と相対的に見てみると三つのパターンが認められる。

1 番目に、祖型甕の比率が他の器種に比べて一番低い遺跡で、これにはさらに極端に低い遺跡とそうでない遺跡の二者がある。

1—① 極端に低い遺跡…菜畑 8 下層 (6.2%)・有田七田前遺跡 (2.9%)・板付 G—7 a・b 下層 (8.0%) で、二番目に低い器種の $\frac{1}{2}$ から $\frac{1}{4}$ しかない。

—② 極端に低くない遺跡…曲り田 W—3 (21.6%)・W—4 (12.3%) で、二番目に低い器種との差はわずかである。

2 番目に、祖型甕の比率が煮沸用土器の中で一番低い比率を示さない（下から二番目に低い）、菜畑 9～12 層 (4.4%)・宇木汲田 IX 層 (18.5%) である。

この三つのパターンは、他の器種のあり方とも相関をもっている。1—①では、煮沸用土器の中で最大比率を占める器種が、50% 前後の数値を示すが菜畑 8 下層ではⅢ類、有田・板付遺跡ではⅡ類で器種を異にしている。1—②では、Ⅱ類とⅢ類との関係には、曲り田 W—3、W—4 でも差はないが、Ⅰ類とⅣ類の両者には補完性が認められる。つまり、W—4 区のようにⅠ類の比率が高ければⅣ類の比率はその分だけ低く、W—3 区ではその逆である。この補完性は、三番目のパターンでも認められる。また三番目のパターンでは、Ⅰ類が 50% 前後という非常に高い比率を示す。しかも、二丈町・唐津といった玄海灘沿岸の西寄りの地域に顕著であることも注意せねばならない。

(2) 夜臼・板付 I 式土器共伴期

菜畑 8 上層と板付遺跡の資料がある。祖型甕の比率は、菜畑 8 上層 (13.4%)・板付遺跡 (2.4%) でかなりのひらきがある。Ⅰ・Ⅲ類・板付 I 式土器の比率は両遺跡とも変わらない。よって両遺跡では、Ⅱ類と祖型甕の比率関係が対照的である。

2 板付 I 式甕成立の背景

前節では、刻目突帯文土器単純期における粗製深鉢と祖型甕の相関性、夜臼・板付 I 式土器共伴期における板付 I 式甕とⅢ類の補完性、Ⅱ類と祖型甕の相関性を指摘した。器種間にみられるこのような相関性と補完性に、板付 I 式

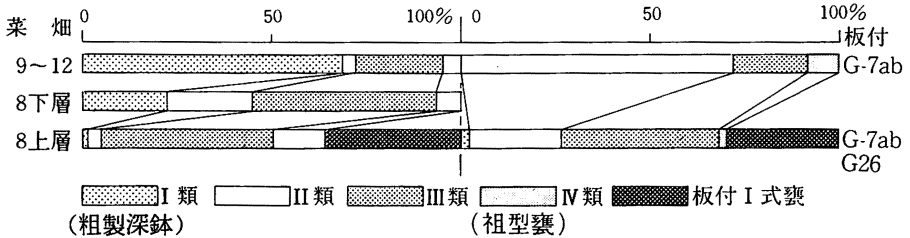


Fig. 11 菜畑・板付遺跡における甕形土器種組成変化

甕成立の背景が隠されているのではないか。Fig.11は、菜畑遺跡と板付遺跡における煮沸用土器の組成変化をグラフに表現したものである。

まず、両遺跡の類似点についてみよう。

組成変化についてみると、Ⅲ類の構成比率は基本的に増加傾向にある。逆に、菜畑遺跡では粗製深鉢が、板付遺跡ではⅡ類が激減している。言い換えると、板付Ⅰ式甕の成立によって影響を受ける器種（粗製深鉢・Ⅱ類）と、影響を受けない器種（Ⅲ類）が存在するのである。影響を受ける器種は、菜畑遺跡と板付遺跡とは異なっている。すなわち型式学的に異なっているわけだが、それは口縁部に刻目突帯を持つか持たないかの違いでしかない。機能的には同じと考えられる。刻目突帯や口唇部直接刻目を文様と考えれば、刻目突帯文土器単純期における甕組成とは、実は体部形態の差、つまり底部に向って単純にすばまる深鉢形、体部上位で屈曲する深鉢形の二つに大別できるの⁽¹⁾である。菜畑9～12層・板付下層とも、体部で屈曲しないものと屈曲するものとの比率は4：1である。そして板付Ⅰ式土器甕の成立による粗製深鉢・Ⅱ類の激減、Ⅲ類の微増は先の比率を約1：1へと変え、屈曲するものの相対比を上げることになる。従って、煮沸用土器としての板付Ⅰ式甕成立の意味は、粗製深鉢・Ⅱ類の機能を継承し、Ⅲ類とセットとなることで夜臼・板付Ⅰ式土器共伴期の煮沸行為を担っていたと考えられる。前節でみた相関性・補完性は、このことを意味していたのである。

岡本勇は、板付式の甕と夜臼式の甕を比較した結果、板付式と夜臼式の比率

に偏りがあることに注目し、「板付式における甕形土器の不足は、この夜臼式の一あきらかに煮沸の痕跡をもつ—約 485 個の甕形土器をもって、ほどよくおぎなうことができるのである。」とし、煮沸行為全般における夜臼式土器と板付式土器の相互補完を想定した⁽²⁾。本稿の分析では、板付 I 式土器の煮沸行為における用途は、粗製深鉢や II 類の用途を継承したものであることがわかった。III 類との相互補完の関係にあることは事実だが、それは板付 I 式土器の不足を補っていたのではないのである。

体部で屈曲する甕と屈曲しない甕との使い分けが、何を背景としているのか今のところ答を出すことはできない。板付 II 式土器段階になると、玄界灘沿岸地域では III 類の存在はもはや見られなくなり板付系の甕で煮沸行為は 100% まかなわれるようになる。周辺の亀ノ甲式分布圏でも、III 類は体部上位の屈曲が消失しており、板付系と同じ体部形態をとる。ここに、III 類の果たしていた機能も板付系土器が果たすようになった事実を見ることができる。まさに、縄文的煮沸行為の完全なる消滅と弥生的煮沸行為の定型化を見ることができるのである。

次に、両遺跡の相違点をみてみる。刻目突帯文土器単純段階で、70% 前後を占める器種は前述したとおり、菜畑遺跡では粗製深鉢、板付遺跡では II 類と器種を異にしている。したがって型式学的な相違点である。この問題については、すでに考えを述べているので再述しない⁽³⁾。

以上、板付 I 式甕の成立を煮沸用土器の成立という観点から検討してきた。板付 I 式甕の成立は、縄文的器種組成（体部で屈曲する甕と屈曲しない甕）を崩壊させることなく、前代からの使用目的による使い分けをそのまま継承していることを明らかにすることができた。その意味で、弥生的器種組成の成立は北部九州地域に関する限り板付 II 式土器段階なのである。

前代（刻目突帯文土器単純段階）における甕の使い分け、使用目的の差が具体的に何を背景としているのか明らかにしえないが、粗製深鉢・II 類・祖型甕と III 類の差一つとして法量差が指摘されており参考となるであろう⁽⁴⁾。

おわりに

本稿では、板付Ⅰ式甕の祖型を刻目突帯文土器に求め、朝鮮無文土器からの渡来要素を認めながらも、縄文側の伝統と規制のもとに板付Ⅰ式甕へと変化していく型式組列を復元し、また煮沸容器の観点から板付Ⅰ式甕の成立を考え、弥生的煮沸形態の定型化について検討してきた。

型式学的には、口縁部の外反化・外傾接合を除いて縄文土器の主体的役割を認め、外反化に関しても、無文土器と直接的に関連づけるのではなく、生産基盤の変化・定着による弥生的煮沸具の成立という、社会の変化が土器に影響を及ぼした結果に求めたのである。もちろん、c口縁の成立を可能とした技術的基盤の整備に無文土器からの影響を完全に排除することはできないが、そのあり方は田中の指摘するように折衷土器としてのそれであり、あくまでも受容側の縄文人が主体的役割を果たすことによって、無文土器とは似て非なる土器＝弥生土器を生む結果となった⁽⁵⁾。弥生的煮沸形態は、板付Ⅱ式土器段階におけるⅢ類の消失により100%の完成・定着を見る。遠賀川流域を西限とし、瀬戸内海・畿内へとひろがる遠賀川式土器甕組成は、唐津から福岡に至る玄界灘沿岸で完成・定着した弥生的煮沸形態が、まさに伝播したものなのである。しかし、亀ノ甲式甕がほぼ100%の組成を示す亀ノ甲式分布圏・瀬戸内甕が煮沸形態のかなりの部分を担っている西部瀬戸内の存在は、弥生時代前期におけるさまざまな煮沸形態の存在を窺せる。そして、前期末段階になると城ノ越・須玖系列（板付系・刻目突帯文系の融合により成立）の煮沸形態をとる北部九州と、板付・遠賀系列の煮沸形態をとる遠賀川～畿内の二大地域に統合される。この問題については別稿を予定しており、今後とも検討を重ねていくつもりである⁽⁶⁾。

最後に、本稿を草するにあたり、下記の方々より御助言・資料の便宜を計っていただいた。末筆ながら記して深甚の謝意を表したい。

岡崎敬・横山浩一・西谷正・西健一郎・田崎博之・田中良之・山崎純男・柳沢一男・杉山富雄・森貞次郎・橋口達也・中島直幸・池田祐司。

註

- (1) 山崎純男「弥生文化成立期における土器の編年的研究」(前掲)。
- (2) 岡本勇「弥生文化の成立」(前掲)。
- (3) 横山・藤尾「宇木汲田遺跡 1984 年度調査出土の土器について」(前掲)。
- (4) 中島直幸「初期稲作期の凸帯文土器」(前掲)。
- (5) 田中良之「縄文土器と弥生土器」(前掲)。
- (6) 藤尾慎一郎「稲作導入期の甕形土器研究」『岡崎敬先生退官記念献呈論文集(仮称)』

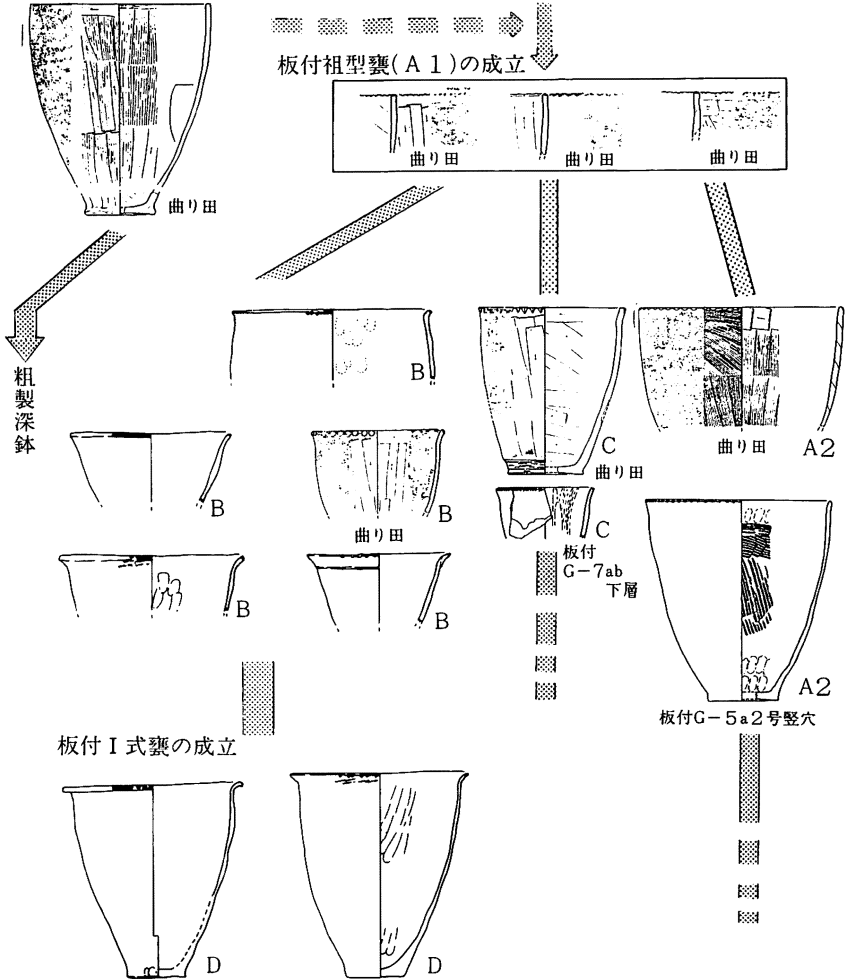


Fig. 12 板付 I 式甕 (D) 成立過程編年図

(縮尺 $\frac{1}{10}$)

(出土遺跡未註記は板付遺跡環溝出土である)